

消えた美しい不思議なにじ

小川未明

青空文庫

それは、ここからは見えないうところでは。

そこには黒い、黒い河が流れています。どうしたとか、その河の水は真つ黒でありました。河が真つ黒であつたばかりでなく、河原の砂もまた真つ黒でありました。そして、その河は音もたてずに、また真つ黒な大きな森の中をくぐつて、いずこともなく流れているのであります。

空の色は、夜ともつかず、また昼ともつかずに、うす暗くぼんやりとしていました。ただ、ため息のように、風が吹いて、忍び足にどこへかいくのであります。そして、そのところには、生き物というものは、なにひとつ動いている姿を見ることができま

せんでした。ただ河原を怪しげな女が歩いているばかりでありました。

いったい、この怪しげな女はなにものでありましようか。年をとっているのか、また、そんなに年をとっていないのか、見ただけではわかりませんでした。顔も肩さきも、その長い真っ黒な髪の毛に隠れていてよく見ることができませんでした。

たまたま髪の毛の間から血の気のない顔が現れたかと思うと、ガラス球のように光った目が、氷のように冷たくあたりを見まわしていたのであります。

この怪しげな女は、灰色の着物を着ていました。そして、めつたに笑うこともありませんでした。女は、やせて骨ばかりにな

った手てをのばして足あしもとの真まつ黒くろな砂すなをすくいました。そして、
 なにか口くちの中なかで唱となえながら、それを空そらに向むかって投なげていました。
 また、あるときは、その河かわの真まつ黒くろな水みずを柄えの長ながい杓しゃく子しですく
 っては、やはりなにやら口くちの中なかで唱となえながら、それを空そらに向むかっ
 てまいていました。そして、その後あとでさも心こころ地ちよさそうに、げら
 げらと笑わらっていたのです。

この怪あやしげな女おんなは姉あねのほうでありました。

「こうして、わたしは、わざわいの砂すなや、水みずをまいてやる。これ
 はみんな下界げかいに落おちていつて人にんげん間まどもの頭あたまにふりかかる。この
 砂すなのかかったものには不平ふへいがつづき、この水みずのかかったものは死し
 んでしまうだろう。わたしは、みんなが不平ふへいに苦くるしみ、そして死し

んでしまうことを望のぞんでいる。わたしはこんな醜みにくい姿すがたに生まれてきた。この宇うち宙ゆうの、ありとあらゆる生き物の命いのちをのろつてやる。そうだ、みんな滅ほろぼしてしまふまでは、こうして、わざわいの砂すなと死しの水みずをふりまくことをやめはしない。」と、灰はい色いろの着物きものを着きた姉あねのほうがいいました。そして、彼女かのじよは砂すなをまき、水みずをまいていました。

ここは、また別べつのところであります。

そこには水すい晶しょうのように清きよらかな流ながれがありました。そして、その河原かわらの砂すなは黄金こがねのごとく光ひかっていました。大空おおぞらはいつもうららかに晴はれて、いい香においのする紫むらさきや、赤あかや、青あおや、白しろの花はなが一面めんに咲さいていました。太陽たいようの光ひかりは、その河水かわみずの上うえにも、花はなの

上うへにも、また砂すなの上うへにもいつもあふれていました。

東雲しののめの空そら色いろのような、また平和へいわな入り日ひの空そら色いろのような、

うす紅あかい色いろの着物きものをきた少女しょうじよが、この楽園らくえんを歩あるいていたの

です。その少女しょうじよは妹いもうとのほうでありましたけれど、ようすも心こころ

も、まったく姉あねとは反対はんたいでありました。妹いもうとはこのうえなく美うつくし

く、また快活かいかつでありましたから、すべての命いのちあるものにはかわ

いがられていたのです。

彼女かのじよがその星ほしのような瞳ひとみをじつと落おとすと、花はなは生いき生いきと

して香かおりました。河水かわみずは声こえをたてて笑わらいました。そして光ひかる砂すな

は、いつそうきらきらと輝かがやいて見みえたのでありました。少女しょうじよ

は、白しろい柔やわらかな手てで金こん色じきの砂すなをすくいました。そして、それ

を清らかな水の中に投げています。

「どうかこの幸福がめぐりめぐって、すべての命あるものの上に宿るように。みんなが幸福で、平和で仲よく暮らすように。」
と云つては、その黄金色に光る砂を河の流れに投げていました。清らかな水の中が、たちまち炎の燃えたつように明るく輝いて見えました。そして幸福のにじは、遠く河の中からわきあがつて、下界にまで、長い橋を懸けていたのでありました。

このにじが空にかかる、下界に幸福が降つたのであります。ある日、暗い空のあなたに、美しいにじのたつのを怪しげなふうをした姉が見ました。そしてガラス球のような、冷ややかに光る目でじつとそれを見ていましたが、やがて舌打ちをして、いま

いましそうにいいました。

「ほんとうに憎い妹めだ。わたしが、こうして下界のものを苦しめ困らしてやろうといっしょうけんめいに、黒い砂をまいたり、河水をまいたりしているのに、あちらではその邪魔をしている。あんなに幸福のにじがかかった。またそれだけ下界の滅びるのが長引くわけだ。よし、妹がそういうようにみんなを守る気なら、わたしはいつそう根気よくみんなをのろつてやろう。」と、姉はいいました。そして、夜も、昼も、小止みなく砂をまき、水をまいていました。

「もう、ずいぶんわたしは、こうしてわざわいの砂をまいたり、水をまいたりした。たいてい下界のものどもは滅びる時分である

うと思うが、どうであろうか。あのりこうなからすは、どうしたかやつてこない。また、あの智慧のあるふくろうはどうしたか、とんと姿を見せない。あの二人がやつてきたなら、そのようすは知れるだろう。」と、姉は独り言をしていました。

するとある日のこと、黒い森のかなたで、からすのなき声がしました。

「あのからすめがやつてきたな。」と、姉は耳をそばだて、口もとに気味の悪い笑いを見せました。すると翼の音がして、大きな一羽のからすが降りてきました。

「よくやつてきた。おまえのくるのを待っていた。下界のようすはどうだ。」と、姉はからすに向かつてたずねました。

「わたしはちようど三百歳になります。だいぶん年をとりました。前は百五十日めでここまでできましたのが、二百十日もかかります。下界は、戦争があつたり、地震があつたり、海嘯があつたり、また饑饉がありまして、人間は幾百万人となく死んでいます。けれど、まだなかなか滅びるようなことはありません。」と、からすは答えました。

髪の毛の長い、灰色の着物を着た姉は黙つて聞いていました
が、

「おまえは下界を立つたのは、二百十日前だ。それまでにわたしは、どれほど砂や水をまいたかしのれない。いまごろはもつとたくさんな人間や生き物が死んでいるだろう。その後のようすが知

りたいものだ。」と、姉あねはいいました。

年としとつたからすは、長い旅たびに疲つかれて、杭くいに止とまつて居眠いねむりをしていた。姉あねは、黒くろい河かわからへびのような長い魚ながさかなをとつて、からすに食くわせました。からすはまた下界げかいに向むかつて旅立たびだちをしたのであります。

からすが去さつてから、約やく十日とおかめにふくろうが帰かえつてきました。「その後ごの下界げかいのようすはどんなであるか。」と、姉あねはききました。

「悪あく病びょうが流りゅう行こうしています。その伝染でんせんの速はやさといつたら風かぜのようであります。この分ぶんなら人間にんげんがみんな死しに絶たえてしまおもうであろうと思おもいます。」と、ふくろうはいいました。

姉あねはこれをきくと、たいそう喜よろこびました。

「きつと、そのことは、あのおいぼれたからすめの立たった後のちのできごとであろう。」といつて、姉あねは河かわの中なかから、長ながいへびのようくろさかなな黒い魚をいくつもとつて、ふくろうにやっていたわりました。

ふくろうは、黒くろい森もりの王おうさまにされました。

幸こう福ふくを下界げかいに贈おくろうと思おもつて、いっしようにけんめいに黄こが金ねいろかがやすなかわななかなな色いろに輝かがやく砂すなを河かわの中なかに投なげていました妹いもうとは、もうこれほどまでに幸こう福ふくを送おくつたことだから、きつと下界げかいはどんなにか幸こう福ふくがゆきわたっていることだろうと思おもいました。

「あの元げん気きのいいとはまだ帰かえつてこないだろうか。あれがきたら、すべてのようすがわかるのだが。」と、妹いもうとはよく晴はれわたつ

た空そらをながめていいました。

ある日ひのこと、まだ太陽たいようが出ない前まえでありました。頭あたまの上うえにつばきおと翼つばきの音が聞こえたかと思おもうと、美しい白しろばとが大空おおぞらをまわりながら地ちの上うえに降りてきました。

「お早はやう。おまえの元氣げんきのいい顔かおを見ると、わたしの心こころまでせいせいします。なにかいい報知しらせを持もつてきたことと思おもうが、きかせておくれ。」と、妹いもうとは、はとに向むかつていいました。

白しろばとは、円まるい目めをみはりながら、若い女神わかめがみの顔かおを見みていましたが、

「それは下界げかいはにぎやかなものでございます。毎日まいにち毎日まいにち、たくさんな婚こん礼れいがあつて、祝いわいの鐘かねが鳴なり響ひびいています。また、

なにかのお祭りまつりがあつて、そのたびに花火はなびの音おとが、あちらでも、こちらでもしています。また、後あとから後あとからと人間にんげんの家うちでは子供どもが産うまれていきます。この分ぶんでゆきましたら、下界げかいはやがて幸福こうふでいっぱいになつて、人間にんげんはみんな命いのちの短みじいのを恨うらむばかりであります。「と申もうしました。

妹いもうとは笑わらつて、はどのいうことを聞きいていましたが、

「それでは、わたしの思おもいがついになつたというものだ。ああ、こんなうれしいことはない。あのいじ悪わるの姉あねがいくら、みんなを不幸ふこうに陥おとしれようとしても、ついに愛あいの力ちからには勝かてなかつた。それでこの宇うち宙ゆうは正ただしい目的もくてきを果はたしたというものです。」と、妹いもうとは、喜よろこんでいました。

そのうちに、また、ある日のこと、かわいらしいひばりが帰つてきました。妹は、ひばりの長い旅をいたわりました。そして、ひばりに下界の有り様をたずねました。

「ご安心遊ばしてください、下界は穀物がすきまもなく、野に、山に、圃にしげっています。また樹々には果物が重なり合つて実っています。みんなは自分たちが食いきれぬほど収穫のあるのを喜んでいます。その有り様は、とてもこの天国の楽園の有り様どころではありません。」と、ひばりは、驚いたふうをしていいました。

「なに、この楽園よりも、もつと下界は美しいというのか？」と、妹は、美しい目を大きくしてたずねられました。

「人間にんげんは、このごろいろいろの花はなを、自分じぶんたちで変化へんかをさせる術じゆつを覚おぼえたので、みごとに咲さかしています。あんな美しい花はなは、この天国てんごくにきましても容易よういに見みることはできません。」と、ひばりは申もうしました。

妹いもうとの女神めがみは、黙だまつてひばりのいうことを聞きいていました。そのうちうちに、自分じぶんも一度ど下界げかいへいつて、その有あり様さまを一目ひとめ見てきたいものものだと思おもわれたのであります。

ついに妹いもうとは、下界げかいへゆく決けつ心しんをしました。けれど、そのようすでは途とち中ちゆう、風かぜや、雲くもや、雨あめや、また多おほくの星ほしなどに、どこへゆくかと目めについてたずねられることをうるさく思おもいましたから、はとに姿すがたを変かえてゆくことにしました。

ある日のこと、彼女はまっすぐに下界を目がけて飛んできました。

高い山が目に入り、ついで、いろいろの建物が目に入るように近づきました。すると、円い屋根もあれば、またとがったものもありました。赤い色で塗った建物もあれば、白い色で塗った建物もあれば、青い色で塗られた建物もあります。五階も十階もある大きな家もあれば、またこぢんまりとしたきれいな家もありました。はどのいったように、いい音楽の音色が街の中から流れていました。そして夜になると、街は一面に美しい燈火の海となりました。

「こんなに美しいとは思わなかった。」と、妹は驚きました。

夜が明けると、人々は、きれいなふうをして自動車に乗り、馬車に乗ったり、また電車に乗ったりして往來していました。

「なるほど、みんなはしあわせであるらしい。」と、妹は喜びました。

そのとき、ふとしたきたないふうをした人間が、はだしでみんなの通る間を、とぼとぼと歩いていました。

「あの人間は、どうしたのだろう。」と、妹は思いました。自分の投げた幸福の砂が独りこの人間にだけかからないはずはない。それにしても、この貧しげな有り様はどうしたのだろうと不思議に思われて、なおもその人間のゆく先を見つづけていま

した。

そのきたならしいふうをした人間は、にぎやかな街の中を通つて、さびしい町はずれの方にやってきました。するとそこには、いままでと反対に、みすぼらしい破れた小舎が幾棟もつづいていました。そして、その中には、みんなこの人間のようなきたないふうをした、青い顔の人間がうようよとして住んでいるのでありました。そこでは、子供が泣いています。病人が苦しんでいます。けれどそれをいたわることも、また救うこともできないほどに、みんながなにか仕事をしたり、働いています。そして貧乏をしています。

「これは、いったいどうしたことだ？」と、妹の顔は、驚きと怪

しみのために血の気がだんだん失せてゆくのでした。自分の投げた幸福が、この人たちだけゆきわたらないはずがないのに、これはいつたいどうしたことだろうと判断に苦しんだのであります。彼女は、はとや、ひばりのいうことを聞いて、もしそれだけ信じていれば、なにも知らずにしまったのだと思いました。それから妹は、もつと道を歩いていきますと、ある大きな木の下に、十ばかりと七つ八つになった、兄弟二人の子供がうずくまっているのを見つけました。

「どうしておまえたちはこんなところに、こうしているのか。」
 といつて、彼女はききました。

ふたり二人の子供は、美しい妹の女神をながめました。

「わたしには家というものがありません。毎晩この木の下で寝るのです。お父さんは死んでおりません。お母さんは、ほうぼうを歩いて、ものをもらって帰ってきます。私たちはここにお母さんの帰るのを待っているのです。」と答えました。

これをきくと、やさしい妹はびっくりしました。そして、「もうこんな惨めな下界には一刻もいたくない。」といって、妹はふたたびはとの姿となって、天上の樂園に帰ってしまつたのです。

妹は、樂園に帰ると、さつそく、風と雨とを自分の前へ呼び寄せました。そして、風や、雨に向かつて、

「おまえたちは、毎晩のように、あの不幸な子供たちを吹いた

り、ぬらしたりして、かわいいそうだとは思わなかつたか。」と、やさしい妹はたずねました。

すると、風も、雨も、声をそろえて、

「私もは、かわいいそうに思っていました。それであの二人の子どもたちを吹いたり、またぬらしたりしたときも、強くなれ、強くなれ、そして、大きくなれ！ といつて、なるだけひどく苦しめなようにしました。しかし、不幸な子供は、けつしてあの二人だけではありません。まだたくさん、たくさん、子供がいます。」と答えました。

妹は、風や、雨に、もう帰つてもいいといいました。そして、ひとりとなつたとき、妹は考えました。

「わたしは、これまで、幸福の砂を河の中に投げていろいろの喜びを下界に送ったのも、けっしてある人々だけを楽しませるためではなかった。みんなのものを喜ばせるためであった。それが、ある人々だけを幸福にさせ、ある人々をあんなに不しあわせにしようとは、思いもよらないことであつた。もうこのうえ幸福の砂を骨をおつて、河に投げることもあるまい。こうして見ると、やはり姉さんが、わたしよりもりこうであるかもしれない。冷酷な姉さんは、よくわたしをわらつたものだ。」

と、妹は思いました。それから妹は、もう黄金の砂を河の中に投げることを止めてしまいました。下界から遠く空を仰ぐと、天の河の色がだんだんと白くなって、そのときから黄金に輝いて見え

なくなつたのであります。

一方、灰色の着物を着た姉は、ふくろうや、からすのいうことを信じて、自分も下界へいって、その困つたり、苦しんだりしている人間のようすを、つくづくと見てきたいものだと思ひました。

灰色の着物を着た姉は、べつに姿を変える必要もなかつたので、ある星の光ももれない真つ暗な真夜中に下界へ降りてきたのです。

そこは広い野原の中でありました。けれどわざわいを下界にまいた姉は、どんなさびしいところを歩いても平気でありました。野原の中には林がありました。林をぬけると大きな墓地がありま

す。そこにはたくさんはかの墓がありました。古いふるのや、まだ新しいあたらしのや、丈たけの高いたかのや、低いひくのがありました。それをば、闇やみをすかして見みまわしながら、姉あねはさも心地こころちよさそうに笑わらいました。そして墓地ぼちを過すぎて、丘おかにさしかかりますと、そこには大きな病びょうい院いんがあります。髪かみの毛けを長ながくうしろに垂たらした姉あねは、病びょういん院いんの内部ないぶに忍しのび込こんで、病びょういん人にんのいるへやを、一つ一つのぞいて歩あるきました。中なかには青あおい顔かおをして、うめいて、眠ねむられずにいるのもあります。また、中なかには苦痛くつうにたえられないで、泣ないているのもあります。中なかには片腕かたうでを切きられ、また両りょう脚あしを切せつ断だんされて不具者ふぐしやになつていおるのもあります。そして今夜こんやにも死しにそうおな重おもい病びょういん人にんもありました。

姉は、これらの人々を見ると、さも心からうれしそうにほほえみました。

「わたしの顔がいくら醜いといったとて、よもやこれほどではあるまい。」といつて、なおあたりをさまよつていました。すると、すぐ隣には狂人を容れた病院があつたのです。

その精神病院には、女や、男の白痴がうようよしていました。昼も夜も見分けがつかずに、彼らは泣いたり、わめいたり、悲しんだり、また声をたてて笑つたりしていました。そしてじつとしてゐるものもあれば、また、たえず歩きまわつてゐるものもありました。

これを見ると、残忍な姉は、あまりのうれしさに身震いがし

たのです。

「ああ、これでいい。下界げかいの破壊はめつも近ちかづいた。」といいながら、歩あるいていますうちに、いつしか街まちへ出でてしまいました。

そこには、大おおきな建たてもの物が、ひっそりとして死しんだもののように横よこたわっていました。姉あねは、右みぎを見み、左ひだりを見みていますうちに、一軒けん燈火ともしびのついた明あかるい店みせを見みつけました。彼かの女じよは、忍しのび足あしをして、その家いえに近ちかづいてのぞいてみますと、中なかでは美うつくしい女おんなや、男おとこがたあつくさんに集あつまっていて楽が器つきを鳴ならし、唄うたをうたい、酒さけを飲のんだり、また、たがいに手てをとりあつて、踊おどつたりして遊あそんでいたのであります。

「これは、また、なんとということだ。」と、姉あねはいまいました。

に、ガラス球だまのような冷たい目を光らして闇やみの中から、それらのおもしろそうに遊あそんでいる人たちをにらみました。ここばかりは、自分のまいたわざわいの砂すなや河かわの水みずがかからなかつたのかと疑うたがいながら、その家の前まえをおそろしい顔かおをして通りとおりました。

すると、また一軒燈けんともしび火のついた家いえがありました。のぞいてみますと、そこにもまた、たくさんの人々ひとびとが集あつまつておもしろそうに笑わらつたり、唄うたをうたつたりして酒さけを飲のんでいました。

「いよいよ不思議ふしぎなことだ。どうしてこれらの人々ひとには、わたしのまいた砂すなや、水みずはかからなかつたろう。」と、疑うたがいながら、姉あねはその家の前まえを怒いかりながら通りとおりすぎました。

この分ぶんなら、まだ世間せけんには、どんな幸福こうふくな人々ひとが住すんでい

まいものでもない、彼女かのじよは不安ふあんに感じてきました。そしてもう一軒けん、念ねんのために、かすかに燈火ともしびのもれる大きな家いえの窓まどさきに近寄ちかよつて、戸とのすきまからのぞいてみますと、へやのうちでは、美しい姉あねいもうとと妹いもうとが、真珠しんじゆや、ルビーのはいった指輪ゆびわや、腕輪うでわを、いくつも取り出して見みくらべているのでした。そしてまたそのへやの中なかには、ピアノがあつたり、ぜいたくな飾りかぎのついた鏡かがみが置いてあつたり、ほかにも大きな額がくなどがかかつていました。

「わたしは、みんなの幸福こうふくをのろつたけれど、こういうように、ある一部ぶの人々ひとびとが不ふしあわせで、ある一部ぶの人々ひとびとがしあわせであることを望のぞまなかつた。わたしは、なにもある一部ぶの人々ひとたちにかぎつて憎にくしみがあるのではない。平等びやうどうにみんなをのろつ

たのであつた。それなのに、この有り様はどうしたことであろう。
 「と、灰色の着物を着た姉は思いました。

彼女は、その夜の中に、黒い流れのほとりに帰つてきました。
 そして、黒い森の王さまにしたふくろうを呼び出して、なぜうそ
 をいったかとしかつて、森の中から追い出してしまいました。

うす紅色の着物を着た妹は、このうえ黄金の砂を河に投げる
 ことは、かえつて不幸の人々を増すばかりだといつて、ついに
 幸福を下界に送ることを見合わせてしまいました。独り灰色
 の着物を着た姉は、どうかしてみんなを、一度はわざわいの砂と
 水に浴びさせて、苦しめてやらなければならぬといつて、執
 念深く、いまだに夜も昼も黒い砂をまき、黒い河水をすく

つて下界げかいに向むかかってまいっているということでもあります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 2」講談社

1976（昭和51）年12月10日第1刷

1982（昭和57）年9月10日第7刷

初出：「童話」

1921（大正10）年8月

※表題は底本では、「消《き》えた美《うつく》しい不思議《ふしぎ》なにじ」となっています。

※初出時の表題は「消えた美しい不思議な虹」です。

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：江村秀之

2013年10月24日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

消えた美しい不思議なにじ

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>